



## 2011 年度リーグ事業報告

とちぎ協働デザインリーグの活動目的は、まちづくりを幅広くとらえ、これに貢献する個人、団体等の自立と協働を実現するために、協働によるまちづくりの調査研究、支援・協力、政策提言等を行うことにあります。この目的のもとに、2011 年度は下記に挙げる事業を実施しました。

### ①行政、企業、他団体等への協働方策の提言

1-1 情報誌「リーグファイル」の刊行（3回）

### ②ボランティア・NPO の自立と協働を支援する研修・教育、協力・指導助言

2-1 コミュニティ・カレッジ

目的：地域コミュニティを守り育てるコミュニティリーダーの育成（栃木県コミュニティ協会より受託）

年間テーマ：まちを育てる元気づきと養成講座 2011

第1回：開講式／ワークショップ「わがまち・コミュニティの自慢・特徴・課題」

第2回：自治体振興計画とコミュニティづくり

第3回：バスツアー研修（益子町）

第4回：わがまち行政へのインタビュー結果発表

第5回：地元自治体へのコミュニティづくり提案骨子発表／閉校式

2-2 社会貢献活動現場の体験訪問事業

第1回：NPO 見学バスツアー-in 鹿沼（鹿沼地域）

第2回：NPO 見学バスツアー-in 野木（野木地域）

2-3 とちぎ学生未来創造会議への事業協力

2-4 とちぎコミュニティ基金の運営（共同）

2-5 講師派遣：理事及び研究員の県内派遣（5回）

2-6 伝えるコツセミナーの開催

2-7 市民研究員育成事業への参加

### ③とちぎボランティアNPOセンター（ぽ・ぽ・ら）の管理運営

当リーグの主要な事業であり、多くのボランティア・NPO 団体や関係機関との連携・協働により実施。業務内容は多岐にわたります。詳細は別途事業報告書を参照のこと。

### ④リーグのミッションを達成するために必要な事業

4-1 NPO等からの提案協働事業

①地域および高齢者の実態に即した見守り体制構築の方策に関する調査研究

2010 年度に選定した3事例地区を対象に配票調査とその成果を公開するミニ・シンポジウムを開催。

②とちぎの農村景観と食文化を素材とするルールツーリズムの基盤づくりと実践策

モニター会議を設置し、ルールツーリズムに関する情報発信の現状と課題の把握および「美しい田園風景協働保全支援事業」の採択地区に関する情報を収集。

### ⑤震災対応

5-1 テーマ別プラットフォーム事業

①東日本大震災避難者支援事業

とちぎ暮らし応援会の構成団体として地域の交流サロン・情報ステーションの開設支援、支援者をつなぐネットワークの構築など。

### ⑥地域・協働・創造webサイトの構築

6-1 検討委員会の運営・データ入力

6-2 多様な主体の協働理解促進事業（企業訪問）

48企業を個別訪問し、協働の説明、意向・実態調査など。

6-3 企業とNPO等との意見交換会事業

第1回：補い合い、活かし合う栃木協働スタイルを探る～NPO等と企業の協働の可能性～

第2回：ソーシャルビジネスをめぐる企業とNPOとの対話

第3回：選ばれる企業、共感されるNPOへ

（以上）

# 被災地行 2012.5



藤本信義／とちぎ協働デザインリーグ

東日本大震災と福島原発事故から1年余りが経ったが、寄付ボランティアで精一杯の身としては、映像でしかとらえられない広汎な被災地のその後を、実像として受け止めたい思いにかられていた。平成24年5月の5日間、日常の仕事を振り切るようにして岩手、宮城、福島の3県をかいま見た車での単独行は、走行距離1,000kmをゆうに超えた。行程は、初日に宇都宮から東北自動車道を北上、花巻市から遠野市を経て釜石市に入り、さらに大槌町へ。しかし宿がとれないため北上市まで戻り、翌日、大船渡市から陸前高田市へ。ここも宿がとれず一関市で泊。ここから気仙沼市と南三陸町を経て石巻市に入った。石巻市と女川町は、地元で建設会社を営む旧知の社長夫妻が案内役をしてくれた。石巻泊の後、仙台で学生時代の友人から震災後の様子を聞き、翌日飯館村を経て、福島市にある村出張所に村長を訪ね、宇都宮に戻った。以下は紙幅の関係で、この行程から2地域だけを採り上げた視察記である。

## ■海近くの住宅地にて（気仙沼市）

荒廃した風景に衝撃を受け続けた被災地行は、3日目に入っていた。荒れたままで未だに異臭を放つ気仙沼港から南三陸町に向かう途中、霧の中に一面の菜の花が浮かび上がってきた。カメラを片手に車外に出ると、そこもまた、かつては一群の家屋敷があったことを多くのコンクリート基礎が物語っており、菜の花はその屋敷周りで群生していた。小さな漁港の破壊された岸壁から100mも離れていないところで、Oさん（69歳）は、ひとり菜の花に囲まれて、自宅の残された基礎の一部に物置を手作りしていた。実は3日目にして、これが初めて被災された方の話を訊く機会になった。数多く経験してきたいつもの聞き取り調査と違い、当事者への気軽な声かけは自戒すべきとの遠慮が

働いていたせいもある。

\*

この行政区（大谷南）は95戸のうち81戸が流失、死者・行方不明は15人。身内では近くの実家に住む兄の嫁が流された。自宅は敷地200坪で、53坪の建家があった。定年後、退職金を注ぎ込んで増築したのに、6年10ヶ月住んだだけだった。仮設住宅は9坪に過ぎない。

霧でかすんで見える集会所は海拔10mの位置にあり、避難所に指定されていた。しかし、3.11の時は定置網の番屋が流され始め、更に高いところにあるお寺に避難、ここで3ヶ月を過ごした。自分は避難所生活の責任者で、行政区長でもあった。自宅より上にある国道の海拔は16mだが、津波は更にこの道路を2m上回っていた。

車で数分の中学校グラウンドに建てられた仮設住宅に165世帯が入居した。ここの「親睦会」の責任者もさせられており、ボランティアを始め訪問客が多く、自分の仕事がかたどらない。今後の暮らしについては、高台移転案が地権者の承諾を得られた。自力建設をする世帯と、市が事業主体となる復興住宅（賃貸）に住む世帯の両方を合わせ、130世帯がまとまって移転することを予定しているが、いつのことになるか。息子は東京にいるし、これからは、妻と二人暮らしなので小さくとも復興住宅でいいかと思っている。ただ、とりあえずの仮設住まいでも収納スペースが全く足りないのも、こうして物置を作っている。

\*

ヒトケのないかつての住宅地にOさんの金槌音だけが聞こえていて、物置は完成に近づいていた。しかし、彼がこれからの暮らしについて「立ち直れる気がしない」とつぶやいたのは、こう言ったあとだった。「山野草を集めるの

が好きで、サツキも60鉢ほどあった。今、山に入ってそれらが咲いているのを見ると、思い出して悲しい。」

被災地から自主避難した他の事例でも、避難先の道際に、自宅の庭に咲いていたバラを見つけて胸が詰まったという報告を聞いた。丹精込めて育て慈しんだ同じ花を思いがけず見て、逆にそれが、身近な人をはじめ、全ては戻らないことの痛みを再発させる引き金となっているのだろうか。

### ■飯舘村への道すがら

津波の被災地から原発事故の被災地に目を転じると、地域の現実には違った様相を見せる。後者は、どちらかといえば目に見えない破壊のほうが進んでいる。浪江町、双葉町などの沿岸部は両者が複合しているが、ここでは、福島第1原発から30km圏外に位置しながら、全村避難（計画的避難区域）の指定を受けた山間部の飯舘村を採り上げる。

\*

飯舘村は筆者にとって身近なむらである。かつては畜産（和牛）によるむらづくりのモデル事例として、3年間、調査研究で世話になった。加えて、両親は晩年南相馬市で暮らしたので、墓参には二本松インターから川俣・飯舘を抜けるルートを行き来している。今回は仙台発ゆえ、東北自動車道の国見インターを降りて南下するルートを選んだ。途中、中世の館跡の案内を見つけ、食事と昼寝に格好と思い標示に従った。初夏の日差しが注ぐ新緑の公園は、全く人影がない。閉鎖された管理棟の前に、太陽電池らしきものを備えた高さ1.2m程度の標注が立っている。近づくと、 $\mu\text{Sv/h}$ の単位に電光数字0.585が読みとれる。これが固定式の放射線量計であることに初めて気づいた。平常値は0.05マイクロシーベルト前後とすると、その10倍余りだ。日陰の車内での短時間休憩程度ならまったく問題なしと自己判断してみても、静まりかえった緑の空間がそれまでとやや違って見えた。

昨年5月、空き家になっている両親の家がどうなっているかを調べるために飯舘村を通った。全村の計画的避難が始まった頃である。日頃は交通量の少ない道であるにも拘わらず、救援物資や資材を運ぶトラック、一般車などが頻りに往来していることの異常に加えて、水の張られた田は一枚もなく、耕起したまま放置されている風景が、ヒトケのない村に違和感のある空気を送り込んでいた。

今回、別ルートから入った村は、水田・畑、採草地全てが

雑草に覆われているように見えた。とりあえず村役場周辺の現状を見、そこから車で30分ほどの「飯舘村役場／飯野出張所」に向かい、菅野典雄村長とS氏（避難者生活支援チーム総括）に会う。日々の報道取材、議会対策等に追われている村長に、たとえ短時間でもねぎらいの挨拶を、と決断したのは、調査研究で世話になったS氏が、今年1月の「とちぎ暮らし交流集会」に来てくれたからだ。

### ■村への強い思い

議会委員会の休憩時間を割いてもらい、二人に会うことができた。学生達と村に入った当時は、菅野村長誕生の前で、氏は囑託の公民館長を務めており、牛も飼っていたので調査に伺った覚えがある。飯舘牛はブランド化されて名が知られるようになったが、村が全国的に評判になったのは、氏が公民館長時代に、農家の嫁をヨーロッパ農村の研修に送り出す「若妻の翼」を実現させてからである。それも秋の農繁期に20人という大胆さで、これが村の閉鎖性に風穴をあけた。

今、既存の村役場も一部は機能しており、道向かいの活性化センターは、防犯を主な任務とする全村見守り隊380名の詰め所に使われている。隣接の特別養護老人ホームは、100名弱の入居者をケアしている。他に移すのは本人に多くの負担をかけるし、建物内にとどまる限り低放射線量で問題なしとの見方である。であれば、屋内作業中心の工場も操業可能との村長判断から、現在は6社で400~450名の従業員が働いている。彼らは1時間圏内の避難先から通勤している。

### ■忘れないことこそ

M9.0がもたらした激甚災害は、異なるすがたをとって地域に決定的ともいえるダメージを与えた。共通しているのは、コントロール不能の環境破壊によって、そこに住む人々の暮らしを根こそぎにしたことだ。しかし、「暮らしの再建」こそが喫緊の課題であることは論を待たないにも拘わらず、ごく最近、国は懸案の整備新幹線に3兆円余を注ぎ込むことを決めた。財源難の中で、それを除染費や移転費の一部に振り向ける用途変更ができないほど、我が国の政治は硬直化しているのだろうか。幹線交通網に託された市場経済の論理が先行して、暮らしを破壊された人々への目線がないがしろにされてはいないか。この大災害を忘れないための単独行であったが、国は、もはや「地域の自立」に頼って、できるだけ早めに忘れたがっているように思えてならない。（完）

## 【書評】わたしにできること。

— 個人の「なにかしたい！」から始まった12の絆の物語 —

筑波君江 著   メディアファクトリー   2012年3月刊

西田直樹 / とちぎ協働デザインリーグ常任理事、作新学院大学女子短期大学部教授



### 目次

はじめに

第一章 これまでにない新しい支援の形

・インターネットが変えた被災地支援

第二章 日常の中でできる支援

・得意なことの延長に支援がある

第三章 被災地での支援

・被災地支援の3つの段階

第四章 内陸に住む者の“責任”

・内陸からの広報支援

第五章 これから、わたしたちにできること

あとがき

昨年の東日本大震災大震災は、私たちの人生観や価値観を大きく変えたと思う。平凡かもしれない自分の日常生活に感謝するようになった。また、「今の自分にできる事」や「今の自分がやるべき事」など、自分について考える時間も確実に増えた。

震災をきっかけに、「社会の中で求められる自分」を、気負わず自分らしいライフスタイルの中で探し始める人が多くなっているのかも知れない。本書は、そのような新しい時代の動きや生き方を感じさせてくれる。

筆者の筑波君江さんは、ボランティアや社会貢献、農業などをテーマに執筆活動を行っているフリーライターである。

『わたしにできること。』では、東日本大震災被災者の支援ボランティア活動に携わった12人のリーダーの活動について、震災発生からほぼ1年間の流れを紹介している。彼らのユニークとも言える支援活動には、学ぶべき事が本当に多い。

「都会のOLが被災地に届ける“お手紙”」や「ママの普段力で支援するギャルママグループ」(第一章 これまでにない新しい支援の形)。「一枚の写真に動かされてコンサートを開

いた元会社社長」(第二章 日常のなかでできる支援)。「タブーなきボランティア集団を指揮した 岐阜県県議会議員」(第三章 被災地での支援)。「原発被災者を支える 会津市民のネットワーク」(第四章 内陸に住む者の“責任”)などが紹介されている。「被災者のために、何かしたい!」という、最初は個人の小さな「思い」が、やがて仲間を増やして被災者支援の活動へと展開した…そんな12のエピソードが、読みやすい文章で綴られている。紹介されているリーダーの多くが、インターネットを駆使して多くの人とつながり活動しているのは、やはり近年の災害支援ボラの特徴だと思った。

「あとがき」の中で筆者の筑波さんは、「国難ともいえるほど甚大な災害が起ってしまったが、それに向き合い被災地と被災した人のために『私にできることはないか』と動き出した人たちは、知恵と力にあふれていた。」と述べている。

ボランティア活動のプロはいない…。いつでも、どこでも、だれにでも…、「だれかの役に立ちたい。」「あの人たちに寄り添いたい。」という思いさえあれば、きっとボランティア活動を始める事ができるのだと、この一冊は教えてくれる。